様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００００２８

研究課題名（和文）部分的真理に基づく対応説的真理論の構築

研究課題名（英文）Construction of the Correspondence Theory of Truth Based on Partial Truth

研究代表者
加地　大介（Kachi, Daisuke）

埼玉大学・人文社会科学研究科・教授

研究者番号：５０２５１１４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、当研究者が長年にわたって追究してきた現代的な形での実体主義的形而上学を実在論的観点のもとで体系化し、真理論の側面から補強することを目標として、真理値空隙を許容する「部分的真理」に基づく対応説的真理論を構築することを試みた。
　その結果、真理付与理論を中心とした最近の対応説的真理論の流れに与しながら、部分論理の活用や真理受容者の再検討などによって、存在論的部分性に適切に対処できるような対応説的真理論の基礎を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　実在論的な真理論として最も標準的なのは対応説的真理論であるが、対応説は通常、真理値空隙を許さない強い意味での二値原理を暗黙の前提としている。これに対して、本研究では、真理値空隙を許す弱い意味での二値原理のもとでも対応説的真理論を展開できることを示した。
　また、それによって、力能性や生成的可能性などの実体的対象の存在性格に由来するいくつかの存在論的部分性に即した形での対応説的真理論の基礎を構築することができた。

研究成果の概要（英文）：This research attempted to construct a correspondence theory of truth that is based on partial truth, which admits the truth-value gap, aiming at systemizing a contemporary substantialist metaphysics, which the present researcher has been pursuing these years, and buttressing it from a point of view of the theory of truth.
As a result, following the ways of the recent correspondence theories of truth, which is represented by truthmaker theories, the present researcher constructed a foundation of the correspondence theory of truth that can deal with the ontological partiality, by employing a partial logic and reconsidering truthbearers.

研究分野：哲学

キーワード：部分的真理　対応説的真理論　真理付与理論　真理の担い手　部分論理　実体主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

「部分的真理」とは、真理値を持たないような命題を承認する真理概念すなわち、いわゆる「真理値空隙」を許容する真理概念であるが、真理の部分性に関わる主張を現代において最初に最も明確な形で提示したのは、ウカシェーヴィチである。彼は、未来の偶然性を根拠としていわゆる「二値原理」を否定し、「真」「偽」以外に「不定」を表す第三の真理値を認める「三値論理(three-valued logic)」を創始したのだった。

しかし彼の三値論理は、「不定」という値を「真」「偽」と並ぶ同等の真理値として位置づけていたため、真理値の「空隙」を許容する論理という厳密な意味での「部分論理」とはいえず、その結果として、条件法の不自然さや同一律と排中律の乖離などのいくつかの問題点を抱えていた。そこで、それらの問題点を克服している論理体系のひとつとして、その後登場したクリーニの（強弱二種の）三値論理を主に利用しながら、部分論理の諸体系の構築と整備が行われ、情報の不完全性に対処するための情報論的・認識論的関心や「嘘つきのパラドクス」をめぐる意味論的関心のもとでの研究が中心的に遂行されていた。

一方、事実との対応性によって真理を特徴付ける真理の対応説は、アリストテレスにもその源を見出すことができ、現代でもラッセルやオースティンらによって唱えられた正統的な立場であるが、「対応」や「事実」などの概念の不明性を根拠として強い批判に晒され、長らく不遇であった。しかし近年、ラッセルの「判断の多項関係 (multiple relation) 理論」を再活用したニューマンの対応説やアームストロングやサイモンズらによる「真理付与者理論」などによって、復興の兆しを見せていた。

２．研究の目的

真理の対応説は、形而上学的実在論と親和性の高い立場であるため、同様の親和性を持つ（真理値空隙を認めない）二値原理が暗黙の前提とされている場合がほとんどである。これに対し、本研究では、実在論を保持しながらも、真理値空隙を許容するような真理概念のもとで対応説を構成することを目指した。また、このような課題は、現代的な形での実体主義的形而上学を追究する過程で自覚されてきたものであり、そのような形而上学を真理論的観点から実在論的理論として補強することを展望していた。

３．研究の方法

＜真理の部分性に関して＞

(1)部分論理における否定と妥当性

部分論理における否定と妥当性部分的真理概念のもとでは、「真でない（＝偽であるか、または真偽いずれでもない)」ということと「偽である」ということが一致しないため、それぞれに対応する「外的否定」としての弱い否定（たとえば「ソクラテスは医者である、ということはない」など）と「内的否定」としての強い否定（たとえば「ソクラテスは医者ではない」など）とを区別することが自然である。するとそれに伴って、「すべての前提を肯定したならば帰結を否定できない」という意味での論証の妥当性の定義についても複数の候補が考えられることになる。そのいずれが適切であるかについて検討した。

(2)実体主義的存在論における真理の部分性

実体的対象を基礎的存在者として認定する実体主義的存在論においては、少なくとも次の三通りの場合に真理の部分性が発生する：①当該の可能世界または時点において当該の実体的対象が不在の場合、②当該の実体的対象の当該の力能が正負いずれの閾値にも達していない場合、③当該の実体的対象に関する未来事象が成否いずれにも確定していない場合。これらそれぞれの場合における真理の部分性には固有の特徴があるので、それらを一括し処理できる一般的な部分論理の体系を構成できるのか、それとも、それぞれの特徴に合わせた形で個別的な部分論理の体系を構成すべきなのか、検討した。

＜真理の対応性に関して＞

(1)偽値付与者の存在論

真理値空隙を許さない「全体的真理(total truth)」の概念に基づく真値付与者の理論では、真値付与者の「不在」によって命題が偽となることを説明できるが、部分的真理概念を前提とした場合は、命題が真偽どちらでもない場合と偽である場合をその方法では区別できないため、命題を偽にする存在者としての「偽値付与者」を措定しなければならない。この点に関するラッセルやジャケットらによる先行研究について調査したうえで、適切な偽値付与者の理論を構成することを試みた。

(2)真理値受容者の存在論

真理の対応性を十全な形で規定するためには、真理値付与者のみならず真理値受容者の存在論的規定を行うとともに両者の関係の存在論的性格についても検討しなければならない。真理値受容者としては「命題(proposition)」を採用するのがもっとも一般的であるが、その存在論に関しては、可能世界の集合または一種の順序項として捉える見方がしばらく大勢であった。し

かしこれらに対するソームズやキングによる批判が主たる契機となり、命題を抽象的単純個体、抽象的構造個体、文トークン、文タイプ、事実、性質、認知できごとタイプ等として規定する種々の立場が乱立していた。これらの命題論・真理論について比較検討しながら、真理値受容者の存在論と真理の対応性についての自己の立場を確定することを試みた。

４．研究成果

(1)部分的真理の源泉のひとつとしての真理の時間性

論文「時間的実在論における真理の時間性について(1)」において次のような考察を行った。

まず永久主義・（狭い意味での）時間主義・相対主義という、真理の時間性に関する三つの意味論的立場の異同について分析した。その結果、時制表現の指標性を根拠として命題の意味内容を変化させたうえでその真理値は固定する永久主義に対し、意味内容を固定させたうえで真理値を変化させる（広い意味での）時間主義が対比され、さらに後者のうちで、評価者への真理値依存性を認める相対主義と、それを認めない非指標的文脈主義としての（狭い意味での）時間主義が対比された。以上を踏まえ、次にこれらのうちの永久主義のひとつの拠り所となっている G.エヴァンズの時制論理批判の妥当性について批判的に検討した。その結果、エヴァンズは時制論理における真理の時間性を不適切な形で解釈していること、そしてその不適切さは、現在世界を一世界内の一文脈としてではなく現実世界と同様の完結した世界として捉える現在主義者 A.N.プライアーの時間的実在論に対する無理解と、様相論理における現実性についての誤解とに由来することを示した。

以上の考察により、部分的真理を要請する重要な要因のひとつである真理の時間性の根幹を具体的な形で確認することができた。

(2)プラグマティズム的真理における部分性

論文「実体主義の論理としての部分論理(1)」において、実体的対象を基礎的存在者として認定する「実体主義的形而上学」の観点から要請される「部分論理」はどのような基準のもとでどのような選択を行うべきであるかを検討するという課題に向けての基礎的考察を行った。具体的には、N.C.A.ダ・コスタと S.フレンチがパースやジェイムズのプラグマティズム的真理論を参照しつつ『科学と部分的真理』(2003)の中で展開した議論を手がかりとしながら、部分論理の前提となる「部分的真理」の形而上学的含意について考究した。

その結果として、彼らの議論には実体主義的形而上学の観点からも評価できる側面をいくつか見出せるが、彼らの真理論がもっぱら認識論的観点に基づいているために、真理の部分性や時間性を消極的な形でしか捉えられていないという問題点を指摘した。そのうえで、特にジェイムズの真理論には対応説的な真理論をより柔軟で強力なものとする積極的な動機があったことを確認するとともに、存在論的観点に基づけば、部分的真理には実在そのものの動的性格や形而上学的な不確定性を捉える等の積極的意義を見出すことができる、ということを示した。

(3)部分的真理の受容者としての述定

2022 年 10 月 29 日、東京大学で開催された哲学会第 61 回研究発表大会における依頼発表およびそれに基づいて作成した論文「真理の担い手としての述定」において、どちらかと言えば言語哲学の文脈で 2010 年頃から S.ソームズや P.ハンクスらが提示している「真理の担い手としての述定」という発想を主な手がかりとしつつ、改めて真理の担い手についての形而上学的考察を行った。

その結果として、「真理の一次的(primary)担い手はトークン行為としての述定である」というハンクスの主張を基本的に採用することとした。また、それによって、真理値空隙を許容する部分的真理が本来的な真理のあり方として帰結することを主張した。その一方で、ハンクスの述定概念があくまでも古典述語論理の枠内での外延的な述定に縛られているという点においてあまりに一面的であることも指摘した

(4)真理付与理論への述定論の応用

Springer 社発行の学術雑誌 *Asian Journal of Philosophy* における特集 Metaphysics: East and West に招かれて論文'Predication and Truthmaking: An Improvement on the Essentialist Approach to Truthmaking'を投稿し、査読を経て同誌に掲載された。

この論文では、現代における対応説的真理論の一形態と考えられる真理付与理論における「真にする」という関係について、それが単なる偶然的なものではなく何らかの必然性を伴う関係である以上、その関係項のひとつとしての真理の担い手の「本性」というものを重視せざるをえないという問題意識のもとで、真理の担い手と真理付与関係についての考察を行った。

その結果、その必然性の源泉を真理の一次的な担い手としての述定という行為トークンの本質に見いだした。また、それによって、J.ロウと D.アームストロングによって示された真理付与への本質主義的アプローチにおいてそれぞれが採用する真理の担い手のゆえに発生するいくつかの問題点を克服できることを示した。また、無時間的・無時制的な真理に代わって現在時制による真理を本来的な真理と考えるべきであることもハンクスの述定論から帰結すると主張した。

(5)その他

本研究が属する「哲学的論理学」・「分析形而上学」という研究分野のうち、前者への入門書である『論理学の驚き：哲学的論理学入門』（教育評論社）を上梓するとともに、日本科学哲学会の依頼により、後者に属する『虹と空の存在論』（飯田隆著）の書評を学会誌『科学哲学』に発表した。

また、論文「なぜ私は成長ブロック説を採らないのか：秋葉氏に答える(1) 」において、真理の部分性をもたらす重要な一要因としての真理の原初的現在性の時間論的根拠となる現在主義を擁護することにより、本研究の前提となっている実体主義的存在論の再強化を図った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Kachi Daisuke	４．巻 2(61)
２．論文標題 Predication and truthmaking: an improvement on the essentialist approach to truthmaking	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Asian Journal of Philosophy	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s44204-023-00119-6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 加地 大介	４．巻 137(810)
２．論文標題 真理の担い手としての述定	５．発行年 2023年
３．雑誌名 哲学雑誌	６．最初と最後の頁 146-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 加地 大介	４．巻 58
２．論文標題 なぜ私は成長ブロック説を採らないのか：秋葉氏に答える(1)	５．発行年 2022年
３．雑誌名 埼玉大学紀要. 教養学部 = Saitama University Review. Faculty of Liberal Arts	６．最初と最後の頁 27～44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24561/00019741	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 加地 大介	４．巻 57
２．論文標題 実体主義の論理としての部分論理(1)	５．発行年 2021年
３．雑誌名 埼玉大学紀要. 教養学部 = Saitama University Review. Faculty of Liberal Arts	６．最初と最後の頁 21～36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24561/00019420	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加地　大介	4．巻 56(1)
2．論文標題 時間的実在論における真理の時間性について(1)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 埼玉大学紀要.教養学部	6．最初と最後の頁 35-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24561/00019095	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加地　大介	4．巻 53(2)
2．論文標題 書評　飯田隆『虹と空の存在論』(ぷねうま舎，2019年刊)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 科学哲学	6．最初と最後の頁 324-327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4216/jpssj.53.2_321	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 加地 大介
2．発表標題 真理の担い手としての述定
3．学会等名 哲学会
4．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

1．著者名 加地 大介	4．発行年 2023年
2．出版社 春秋社	5．総ページ数 264
3．書名 穴と境界：存在論的探究[増補版]	

１．著者名 加地　大介	４．発行年 2020年
２．出版社 教育評論社	５．総ページ数 254
３．書名 論理学の驚き：哲学的論理学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap
https://researchmap.jp/kachi/

埼玉大学学術情報リポジトリSUCRA
https://sucra.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=-createdate&search_type=0&q=%E5%8A%A0%E5%9C%B0

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関